

コロサイの信徒への手紙 4章2節～6節

目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい。同時にわたしたちのためにも祈ってください。神が御言葉のために門を開いてくださり、わたしたちがキリストの秘められた計画を語るができるように。このために、わたしは牢につながれています。わたしがしかるべく語って、この計画を明らかにできるように祈ってください。時をよく用い、外部の人に対して賢くふるまいなさい。いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。そうすれば、一人一人にどう答えるべきかが分かるでしょう。

私たちの務めを確認しつつ歩みだそう

日本バプテスト連盟がスタートし、78年が経ちました。この間日本は敗戦後の復興、経済的な高度成長を経験、バブル経済とその破綻を経験しました。団塊の世代と言われる人口の急増から、今では人口の減少、少子高齢化が課題とされています。連盟の歩みを振り返るときに、日本社会の政治や経済の動きと教会の状況や直面してきたテーマ、そして、現在直面しているテーマが重なります。バプテストは聖と俗という二分法ではなく、この現実の人間社会の中でキリスト者として自覚的に生きるということを大切にしてきました。ですから、社会状況と教会が連動するのは当然のことと言えるでしょう。

39年前、私は神学校に入学しました。新約学の先生のお一人が聖書の研究のためにコンピューターを導入されていました。そのころ大学のいわゆる文科系の研究室の中にも徐々にコンピューターを用いる先生が現れましたが、まだ、色物扱いをされている状況でした。神学校にコンピューターを導入された先生は、「これまで、長い年月にわたって、教会が情報の発信や文化の先端にいた。グーテンベルグの印刷機の発明と聖書の普及が結びついていたのはその象徴だった。しかし、コンピューターの時代になり、教会は先を行く存在ではなくなり、追いかける側になる」と話しておられました。

文化、教育、福祉など教会やキリスト教精神が社会をリードしてきたことは事実と思います。しかし、今、私たちは社会に学び、いわゆる「世」の人々の声を聴くことを大切に歩んでいます。そして、そのような姿勢の中でこそ、私たちが伝えるべきこと、キリスト者だからこそ語ることでできる「ことば」を見出すことができるのではないのでしょうか。そして、その「ことば」をどのように伝えるのか、そこでは新しい技術を利用していくことも大切でしょう。今、小学校4年生になるとローマ字が必修だそうです。それはローマ字入力に対応するためだそうです。そして、プレゼンのためのパワポを作るのです。50年前の自分の小学生時代と比べて隔世の感があります。この世におもねるのではなく、しかし、変化を受け止めつつ今の時代に届ける方法を見出していくことも大切です。

16の教会でスタートした日本バプテスト連盟は現在、285教会と28伝道所となっています。しかし、スタート時の16の教会の中にはすでにその役割を終え、閉鎖した教会があります。2月に開催された第70回定期総会では、二つの教会の連盟脱退と教会消滅の報告がなされました。キリスト教会の状況は教派を超えて厳しい状況にあることは客観的な事実です。そして、この教会が経験している厳しさは、社会が直面している厳しさと重なります。連盟78年の歩みを振り返ると、良いときも、そうでないときも、教会と社会は連動していたのではないのでしょうか。そして、厳しい状況の中にあるからこそ、復活の希望を示す福音が必要だということ、キリストのメッセージが必要だということを私たちが実感をもって確認するならば、おのずと語るべき「ことば」を見出すでしょう。

聖と俗、教会と社会、市民であることと信仰者であること、これらを二分化することに異を唱えた私たちバプテストは、社会の影響から逃れるのではなく、今、この時に自覚的信仰者として歩いていくこと、聖書と祈りを通して与えられたセンス（感覚）をもって語り、生きることを改めて大切にしたいと願うのです。

「今、共にキリストを証しするために」

イエス・キリストのこの世で語られた「ことば」を思い起こし、この地上でイエス・キリストが誰と共に歩み、だれの「ことば」を受け止めておられたのかを思い起こしつつ、自覚的にその背中を追いかける者として、78年目の歩みを進めていきたいのです。